



さくら通信



Hoju
Group
宝樹会

No.14

2019

宝樹会によるウィーン発の浄土真宗会報誌

道を求めるころ (9)

道を求めるころ (その2) 1

岡本英夫

真実を求めて立ち上がる

前号は「道を求めるころ」のテーマのもとに、「雪山童子の求道の物語」について触れてみました。真実を求める雪山童子が、真実が語られている前の半偈を聞き、しかしそれで満足せずに、自ら立ち上がって後の半偈を求め、羅刹という鬼からこれを聞いていこうとする。そのためには自らのいのちを投げ出すというお話でした。

人は誰しも真実を求めている。そしてまた誰しも、その道の途中にいるのです。これまでの歩みが僅かではないように思えても、その途中にいる。逆に随分と歩んできたように思えても、途中にいる。そして誰もが、その途中のところから自らの新たな決意で立ち上がり、未踏の天地に願いを差し向けて歩んでいくのです。それが「後の半偈を求める」ということでしょう。この求道心に生きる者を「童子」と呼んできました。

雪山童子は「涅槃経 (ねはんぎょう)」という經典に登場する童子でしたが、「華嚴経 (けごんぎょう)」という經典には「善財童子 (ぜんざいどうじ)」が登場します。「華嚴経」はお釈迦様が悟りを開かれた直後に説かれた經典で、大部な量をもって広汎深遠 (こうはんしんえん) な仏教の悟りの世界が説かれていると言われます。その悟りの内容



木のお話(14) 他力本願と自力

浄土真宗でとても大切なことに他力本願があります。「他力」とは他の力。他とは人間を超えた真実のことです。この真実を阿弥陀として仏教は表すのです。お釈迦様の教えが説く阿弥陀の真実の力を、他力というのです。

- *1三毒 貪欲、瞋恚 (怒りの心)、愚痴
- *2貪愛 自己中心的な欲と愛。根本煩惱の一つ
- *3諂曲 相手にへつらって自分の思いを曲げる
こと。
- *4慧眼 真実を見ることが出来る仏の智慧の眼

を、この経の最後の章である「入法界品（にゆうほっかいぼん）」に来たって、一人の童子が次々と多くの善知識を訪ね教えを聞いていくという形で表したのです。

善財童子が訪ねる善知識は五十三人にのぼります。いろいろな人が善知識となって童子に教えを説きます。善知識を訪ね教えを求める童子の心。これを迎え教えを説く善知識の願い。道を求めるとはどういうことか。善知識とは何か。求道上の大事なことが大小様々に説かれる、壮大な求道の物語です。この善財童子の求道の旅の世界を少し覗いてみたいと思います。

求道の出発

善財童子が求道の旅に出発したのは文殊菩薩（もんじゅぼさつ）との出遇いに始まります。文殊菩薩が仏の前を辞して旅に出て覚城（かくじょう）に到ったときのこと。文殊菩薩が来ることを知って、覚城では、多くの人がその教えを聞こうと待ち構えます。覚城という地は仏法の因縁（いんねん）の厚いところなのです。

文殊菩薩が説法を始めてみると、聴衆の中に善財童子がいる。このことを知って文殊は喜びます。善財童子は覚城という仏法の厚い土徳の中に生まれた青年です。「善財」という名がつけられたのは、「仏法という善き財産」を身に得た者という意味があるのでしょうか。いわゆる「宿善（しゆくぜん）」のある青年だったのです。

宿善は仏法に関心を示し、仏法を求めさせます。善財童子も文殊菩薩から初めて仏法を聞き、心に深く突き刺さるものを感じました。童子の胸を打った最初の教えは次のようなものでした。

「迷いを城郭となし、高慢を垣となし、もろもろの趣を門とし、けがれの愛を掘りとす。

愚痴の闇に覆われ、三毒*1の煩惱常にさかり、悪魔を君王となして愚かの者、内に住めり。

貪愛*2（とんない）に縛られ、諂曲*3（てんごく）して正行を壊（やぶ）り、疑惑して慧眼*4（えげん）を障（さ）え、もろもろの邪道を流転す。」

この教えを聞いて、童子は、これは自分のことではないと断言できなかったのです。それどころか、これはまさしく自分のことを正確に言っているのではないかと思った。これまでにはなかった生まれて初めての思いです。

童子も、自己とは何かについてはそれなりに考えてきたことでしょう。しかし、今この教えを聞いてみて、これまでの考え方や生き方がいかに薄っぺらのものであったか。自分なりに考えたとしても、しかし、自分だけでは自分という存在の深いところへ降りきることはできなかったことを、いやというほど知らされたのです。仏の教えを聞かねばならない。この深い闇の心を解決しなければならない。強くそう思ったのです。

（続く）

